

Children's Modeling Expressions and their
Developmental Stages : From an International
Perspective

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森本, 昭宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1346

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



子どもの造形表現と発達段階

— 国際的な視点から捉えて —

Children's Modeling Expressions and their Developmental Stages
From an International Perspective

森本 昭宏

MORIMOTO, Akihiro

I. はじめに

子どもの造形活動の場に触れる機会を海外で積極的に作り、取材交渉を繰り返してきた。肌で体感した幼児教育の現場と、その場で見てきた様々な国の造形表現などを研究。日本の子ども達の造形の発達段階と比較研究した。子ども達が表現したその造形活動の様子や作品収集から、日本とは異なる文化において共通すること、相違点が見えてきた。多種多様な文化、民族的背景に触れ、異文化を知ることが日本の文化を見つめなおすきっかけとなった。

多様性を認め、比較してみるという観点から、様々な国の幼児・児童の造形表現に関する調査・作品収集を15年前から続けてきた。造形表現の発達段階、就学前教育、多文化社会、鑑賞教育など多角的な観点から、表現することの意味や価値を見つめ、創造的人間形成のための教育、育ちにつなげていきたいと考える。

II. 研究方法と目的

造形作品の発達段階や表現様式を国際的に比較しながら、造形・美術教育の共通点・相違点を見出していきたい。様々な国の文化的背景やそれらに起因する教育のあり方等を探ることは、多文化社会が進む日本での多様性を認め、多文化教育への積極的な取り組みにつながることを考える。

今回は世界各国を周り、幼稚園・小学校の教員に直接取材交渉を行った。訪問許可と幼児児童画の絵画造形作品の収集を行った。収集作品等から日本の発達段階との国際的な比較、就学前教育に見られる造形活動、施設的环境構成など研究した。

国の選定は、著者が彫刻家として国際彫刻シンポジウムに招待を受けたことと関係する。国際大会期間中や終了後に、現地調査を繰り返した。帰国後もインターネットを介して知り合った教育者とお互いの国の美術教育や作品を紹介して交流を続けてきた。シンポジウム関連に調査した施設は以下の通りである。

キーワード：造形表現、発達段階、国際

Key words : modeling expression, developmental stage, international

A.アルゼンチンは2006年4月。B.スペインは同年9月。C.イタリアは2008年トリノ、2017年2019年カステロ・テッジーノ市立幼稚園。D.デンマークは2003年、2005年ホイヤー市。E.ドイツは2009年、2011年テューリンゲン州バードランゲンザルツァ市内幼稚園等である。国際シンポジウム関連以外での教育視察は韓国・ニュージーランド・オーストラリアを訪問。オーストラリアは2000年から2004年に、シドニー市内の幼稚園・保育園を連続して訪問した。

Ⅲ. 幼児・児童の「図式期」の造形表現に関する調査

①オーストラリアの多文化教育

多文化教育とは一般的、「多民族国家において、多種多様の文化的、民族的背景をもつ青少年、とくに少数民族の移民など、社会的に不遇な立場にあるマイノリティ集団の子どもたちに対して平等な教育機会を保障するために、彼らのエスニシティ（民族的・文化的貴族性）や文化的特質を尊重して行われる教育」¹⁾と捉えられている。

シドニー市内の幼稚園では年に数回、アボリジニの先住民が幼稚園を訪問して、アボリジニアートを子どもたちに教える多文化教育プログラムが用意されていた。訪問取材したその日は40代のアボリジニの女性（この日は先生として）が楽器ディジュリドゥを机に立てかけ、アートの見本として点描を説明。8人くらいの園児たちはそれぞれ綿棒を持って、画用紙に円が描かれた枠の中に、点描で模様を描いていた。園児は集中して様々な色のついた綿棒を持ち替え丁寧に押し、先住民族のアートを楽しんでいた。

1975年より政権を担当したフレーザー首相

は、「オーストラリア社会において、一中略—多文化的態度が発展するよう多文化主義の奨励が、異なる民族集団の文化的伝統の保持を助け、異文化の相互理解を促進するであろう」²⁾と宣言。1979年から1987年まで補助金を出し全国の学校で多文化のプログラムが実施された。そのプログラムは取材訪問時の2003年でも、教育の理念は引き継がれていた。

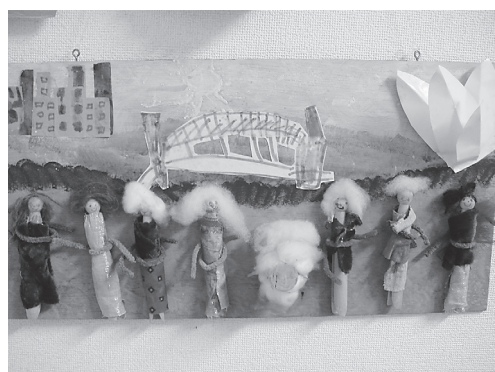


写真1 シドニーの町並みと多文化民族の壁掛け

写真は5歳児の壁掛けの作品（25×45cm）である。板に絵の具で黄色い太陽（中央上部）、海（青）、大地（緑）が塗られていて、シドニーの街（左上）とハーバーブリッジが描かれた紙が切り抜かれて貼ってある。オペラハウス（右上）や羊（中央）、人物がコラージュされている半立体作品である。手前の7人の人物は髪の毛が紫、黒、白であり、衣装も様々な民族衣装を連想させる。多様な人物が登場するこの幼児の作品から、オーストラリア社会の他者との共生、多様性についての学習が早期に行われていることが読み取れる。

・幼児画「頭足人」について

写真2はオーストラリアの男児3歳の「頭足人」である³⁾顔の丸い部分と地平線は黄色

の水性ペンで描かれている。髪の毛と手足は水色、目は緑色、鼻と唇は紫色である。四色のペンを使ってしっかりとした線で描かれていること、地平線のような線があることから、4歳頃（発達段階として大地に立っているように地平線を描くのは4、5歳と見られている）と思われる。右の目鼻なしの「頭足人」は赤一色であるが、左は水性ペンをそれぞれ持ち替えて描いている。

これは昭和30年代に日本美術教育学会の編集委員をされていた児童画教育の研究者、西田秀雄の研究を想起する。世界各国の児童画を研究された西田は、欧米の児童画は目・鼻それぞれ色を変え、唇はていねいに赤で描いているという。それに対し、日本やアジア・アフリカの児童画は黒で描かれていることが多いと述べている。欧米の風物・習慣・気分などとそれとの差が原因となり、それからの環境に育つ子どもの生き方に問題の鍵がひそんでいるものと考えられる⁴⁾とあり、これらのことは心理的な追求であり研究の難しさを述べている。日本の幼児が人の顔を描く様子を見てみると、クレヨンを持ち替えないで黒一色で描く子どもは少なくない。

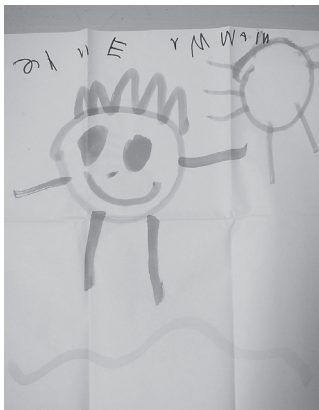


写真2 オーストラリア幼児の頭足人

②アルゼンチンの就学前教育と幼児画

アルゼンチンの義務教育は4歳児クラスから始まる。4歳、5歳児クラスはPrescolar(プリスクール)と呼ばれ、Primaria(小学校)は6歳から13歳までの7年制となる。

学校年度は3月に始まり12月に終了。1学期：3月～5月、2学期：6月～8月、3学期：9～12月初旬となり、南半球に位置するアルゼンチンでは日本と季節が逆になるため、冬休みは7月中旬の2週間、夏休みは12月中旬から翌年3月までの3ヵ月間にも渡る。⁵⁾

訪問した時期は2006年4月。プリスクール5歳児クラス25人の教室を取材した。このクラスは日本でいう幼稚園年長組に当たるが、小学校に上がる前の就学前教育ということで、読み書きを勉強する様子が教室の壁面からも読み取れた。写真3)



写真3 後ろの壁面には「最初のクラス」と書かれた大きい人物と、コルクボードに子どもの作品が貼られ、側面の壁にはスペイン語のアルファベットが大きく全面に貼り出されていた。

教室内は1.5×2.5mくらいの大きい机に4、5人が向かいあって座る。物の貸し借りや友達と話し合いながら勉強していく姿が見られた。座席間隔に余裕があり、色鉛筆を含めた大きめの鉛筆ケースを机の上に開き、大きい絵も描けるスペースがあった。夕方アルゼンチ

ンを出国する筆者のために、子どもたちは絵を丁寧に描いてプレゼントしてくれた。写真4)



写真4 友達と話しながら絵を描いている授業風景

A4サイズの藁半紙に、女兒は家、友達、花、木、蝶、雲、大地のモチーフを多く描いていた。これら図式期（4～6歳頃の描画能力の発達）の女兒描画のモチーフは、「5、6歳児の自由画における男女の表現傾向」表1）をまとめた皆本二三江の、日本の研究と国が違うが類似する。⁶⁾ 皆本は男女の性差による自由画の表現傾向を日本において、ジェンダーという言葉が社会的に認知された1990年代以前から研究をされてきた研究者である。モチーフ・構図・色彩・装飾表現・その他の表現特性を男児・女児に分けて研究。そのモチーフについて表1で紹介する。

この表は日本の子どもの表現傾向である。持ち帰ったアルゼンチンの子どもの絵25枚と比較したが、人間や自然が多く可愛らしいものが多い傾向は日本も南米のアルゼンチンも同じであった。写真5)

5歳児女児の作品であるが家を斜めから捉えて描くのも発達段階の流れの一部といわれ

5、6歳児の自由画における男女の表現傾向		
	男児	女児
モチーフ	人間が少ない	人間が多い
	人工物が多い	自然が多い。人工物は僅少
	強いもの、大きいもの志向	可愛らしいもの、小さいもの志向
	種類が多い	種類が少ない
	具体的名称を持つ傾向	具体的名称が無く、一般性を表す
	たえず変化する	不変である
	使用分布は分散傾向	同一モチーフに集中する

表1. 「0歳からの絵画制作・造形」文化書房博文社p52表中の「モチーフ」のみ抜粋

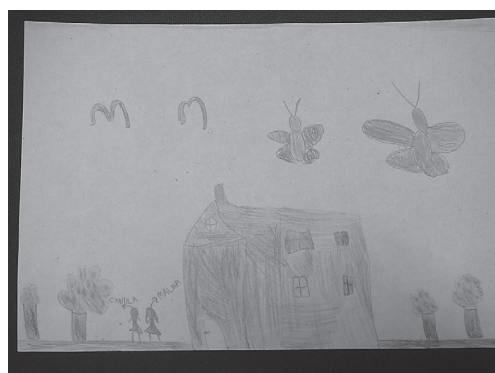


写真5 家や蝶は赤や紫など色彩豊かである。

る（最初は四角の上に三角）。人物も木も蝶も鳥も全て2つ対に描かれているが、仲の良いお友達といつも一緒にいる日常の様子であろうか。また、指導の一環であろうか、人物に友達の名前を文字で付け足す絵を多く見かけた。

男児は人工物や乗り物などが多い傾向にあった。これは筆者が夕方フライトで日本に帰国すると担任から聞いたため、飛行機、虹、木、建物といった乗り物を多く描き、人物が少なかったのであろう。写真6)

殆んどの子どもたちは基底線をしっかりと描いていた。これは大地に根が生え人間や建物がしっかりと立ち上がる絵を描く発達段階



写真6 大地は緑、中央の虹の部分は一部のみ青・緑・赤と塗られる。上部には飛行機が飛んでいる

の図式期である。太陽は上に、地面を下に描くのは、世界共通に見られる造形の発達段階である。子どもは無意識に重力を感じ、天地をしっかりと絵で表現していく。

また、子どもたちの絵に描かれる太陽は全て黄色で塗られていた。アルゼンチンの国旗は水色と白の横線の中央に太陽が描かれ黄色である。日本の太陽の色は日の丸の赤で描かれることが比較的多いが、これらは概念色ともいえるであろう。

アルゼンチンの子どもの絵の特徴を表2にまとめた。

太陽の色	黄色	オレンジ	描いているが彩色なし	描いていない	彩色された94%は黄色
	17	1	4	3	
人物の数	人物1人(自分自身)	複数の人物		描いていない	人物1人は72%
	18	6			
建物・家の有無	あり	なし			52%建物あり
	13	12			

表2 アルゼンチンの子どもの絵 (25名)

国によって太陽の色の捉え方が違うことに、絵画作品を見て気づいた。国旗の色に関連した太陽の概念色は後述するスペインの児童画にも見られる。

子どもたちからの絵のプレゼントのお礼に、折り紙教室を開催した。日本のように小さい紙を折る文化のない子どもたちにとって、折り鶴に挑戦することは無謀であったと気づかされた。2名の担任の協力のもと、全員が折り鶴を完成させた。楽しい国際交流の時間となった。

8時から12時までの午前の授業の中で15分間の休憩があった。子どもたちはお小遣いを親から200円程持たされて登校。休憩時間は学校内の売店で好きなお菓子を買って食べることが出来る。クッキーやビスケット、飲み物などを買って、中庭で休憩時間に食べていた。写真7) お金の使い方を5歳から学校の中で体験できるのである。渡り廊下には卵やモール、麦などを使った人物画のコラージュ作品を見ることができた。その他小学生中学生の絵画作品も収集することができたが、またの機会にまとめていきたい。



写真7 アルゼンチン・ウンキージョ市 Ntra.Sra.de Lourdes学院 (小学校) 休憩時間 (おやつタイム) に記念写真

③スペインの鑑賞教育と児童画

2006年9月にスペインコルドバを訪問した。国際彫刻シンポジウムに招待を受け、ヌエバ・カルテージャ市の市民祭に参加した。オリーブオイルを地場産業とするこの市で、樹齢100年のオリーブ木材2～3mを使って、彫刻を公開制作する。そのために、世界から20名の作家が招待された。市内公園の屋外会場で市民と作品を通して国際交流する。特設舞台では様々なレセプションが開催された。またそこでは連日、幼児から高校生の訪問を受け、鑑賞教育が学校でプログラム化されていた。

スペインの幼児教育（Educacion Infantil）は0歳から始まり、第一段階が3歳まで、第二段階が義務教育に移行する6歳までである。初等教育（Educacion Primaria）は6～12歳の6年間で、義務教育は日本と同じ小学校に相当する。^{7）}

公開制作の彫刻作品が終盤に差し掛かっていたある日、小学4年生の訪問を受けた。40名の子どもたちはあちらこちらと作家の邪魔にならない場所に座り込み、写生を始めたのである。他の学年は作家が制作している姿を遠めで見て回ることが多い。先生とともに質問をして、作家は自身の作品を子どもたちに解説するなど一般的な鑑賞スタイルである。この4年生はスケッチ帳や大きいルーズリーフのような紙を持ち、色鉛筆で時間を掛けて写生を始めた。20名の彫刻家の周りに散らばって子どもは写生していたが、先生は何度も子どもの作品を見て周り、きめ細かく指導を繰り返していた。

大会委員長と引率教員にお願いして10枚程完成作品を頂いた。その2枚が写真8と9である。

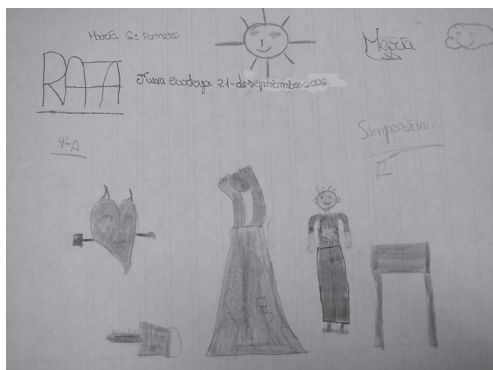


写真8 小学4年生9歳女兒の作品

写真8の作品には、4-A（4学年Aクラス）とsymposiumと、中央上部に文字で書いている。アルゼンチンと同じスペイン語圏とくくってよいのであろうか。作品に文字の解説をつけ、自身の名前を記入する点は同じである。日本では名前や解説は画面の裏側に記入するが、表に解説（記録）を加えている。太陽と雲の絵の間にマリアとあるのは女の子自身の名前と思われる。

太陽も雲もアニミズム的表現である擬人化が見られる。それぞれ一色で描いたのではなく、太陽の外枠（円と光）は赤であるが、目鼻は茶色に色鉛筆を持ち替えて描いている。雲も外が青で目が茶色、口が赤である。オーストラリアの頭足人と同じく、色彩豊かな表現は欧米ならではの特色のようである。作品中央は彫刻作品と作家が描かれている。脚立に乗ってチェーンソーを使用している状況を横並びに描くのは、発達段階の並列画である。

写真9も同じく、チェーンソーで木を削っているが、動きのあるシーンを絵にした男児の作品である。残念ながら人物は手のみであった。2枚の作品の太陽の色も国旗に近い色である。写真9はオレンジと黄色である。スペインの国旗は「血と金の旗」と呼ばれ、

赤と黄色であり、それと同じ色合いの太陽を多く見た。

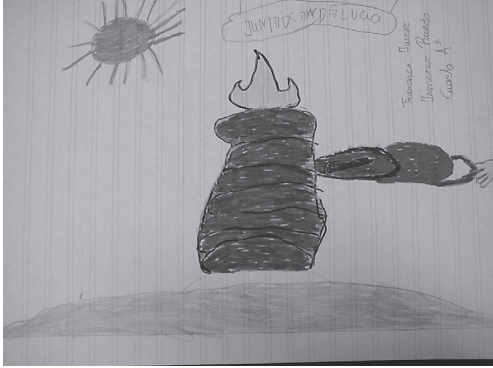


写真9 小学4年生9歳男児の作品

学校教育の一環としてシンポジウム会期中に制作される過程を見せ、作家と交流を持つプログラムは世界各国で見られてきた⁸⁾。学年の幅の広い訪問であったが、長時間に亘り写生の時間を設けて、その後作家と交流するプログラムは稀である。観察画においても動きのある対象物は難しい。彫刻をメインに、作品の構造をしっかりと捉えていて、著者の作品は腕や顔の細部まで描かれている。この絵は大切に保管している。写真10)

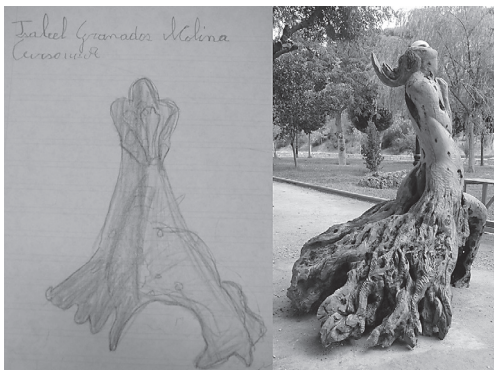


写真10 9歳男児の写生画と著者の彫刻作品

IV. 就学前保育と美術教育

①デンマーク就学前保育

2003年、2005年にデンマークホイヤー市を訪問した。

デンマークにおける就学前児へのサービスの提供は、公立私立とあるが、デイケアセンター（幼稚園）も同様である。3歳児から6歳児までの子どもを対象としている。歴史をもつデイケアは19世紀のドイツ・テューリングン州出身の学者フレーベル思想の影響を受けてきたとある。⁹⁾ 地域の人々の生活と一体となり“教育”と“ケア”を分断させないデイケアセンターに発展させてきた。日本の幼稚園とは違い、午後5時以降も長く開園している。訪問時は6月であり、日没が夜中の23時頃であった。ホテル従業員の子どもたちは、著者がベットに横たわっている22時頃でも、庭のトランポリンで遊んでいた。夜中でも外は明るく、子どもたちがその時間でも平気で外遊びする姿は、新鮮な記憶として心に刻まれている。夏と冬の日照時間の違いから保育時間に差があると考えられる。

ナーサリー、プリスクール（5歳から就学前の7歳を対象とした保育施設）、統合センターといった様々な形態の保育施設があるが、母親の雇用率が90%という高い労働実態から「授業時間外ケア」（out-of-hours care）へのニーズが必然的に高くなっている。¹⁰⁾

デンマークのプリスクールは（5歳児は日本の幼稚園年長児にあたる）小学校に付属している。5歳から7歳を一緒に受け入れている「統合スクール・スタート」の小学校1年生は子どもたちが学校に慣れていくように指導がなされ、1日3時間くらいの授業である。時にはプリスクールの教員が「授業時間外ケ

ア」に入り、授業後の放課後から夕方までケアにあたることもある。¹¹⁾

このデンマークも国際シンポジウムが子どもとの接点である。園児の訪問は午前中が多く、児童の訪問は午後3時頃であった。7、8人のグループと2人の先生が訪問。切り出された木片を持ち帰る子どもや作品の目的・ねらいを質問して感想も述べてくれる子どももいた。リュックサックを背負い、帰宅途中の通学路を少し変更して立ち寄るような行程での訪問であった。作家と芸術作品と子どもをつなげ、国際交流することは子どもたちにとって貴重な体験であり、今後も文化交流事業に作家・研究者として関わっていきたい。



写真11 地元小学生たちとの交流

子どもたちは、大木がチェーンソーとノミで掘り出されていく過程を2、3回来場、鑑賞していたと思われる。この大会は最終日、作品が市民によってオークションに掛けられる。最終日はその子どもが親を連れて、親子で来場する姿が見られた。市のイベントを活用した鑑賞教育は親子の会話を弾ませることもつながっていた。

②ドイツの幼稚園と環境構成

テューリンゲン州出身の学者フレーベルは

幼稚園 (Kindergarten) という言葉を生んだ。幼児教育のための学校は、Kindergarten (KITA)、Kindergarden (KILA) と様々な国で呼ばれている。そのテューリンゲン州の州都エアフルトから北西に位置するバート・ランゲンザルツァ植物園会場で国際シンポジウムが開催された。植物園に隣接する施設は幼稚園であり、2、3回の園児と職員の訪問を受けた。写真12) ドイツの幼稚園で特にベルリンの保育施設にはKITAとKILAの二種類があり、前者は公的機関の側面が強く長時間開園している。表3)



写真12 植物園と幼稚園の通用門を開いて交流

	KITA	KILA
定員	40~400名程	15~20名程
年齢	1歳から就学時まで	1歳から就学時まで
学級	年齢別(1クラス10~20名の1~2歳、3~4歳、5~6歳クラスに分かれている)	縦割り
開園時間(例)	午前6時から午後6時	午前8時から午後4時
施設	大規模、広い園庭あり	小規模、園庭ない場合も多い
保育料	無料	有料
公約補助	100%	各施設による(100%未満)
カリキュラム	特別養護学級、ドイツ語学級を備えているところもある	各園による(多言語、スポーツ、音楽、芸術に特化するなど)
保護者の関与	小	大(保護者がイニシアティブをとる)
日本の保育施設との比較イメージ	認可保育園	認証保育園+幼稚園?

表3 ベネッセ教育情報サイトより
<https://benesse.jp/kyouiku/201212/20121212-1.html>

この大会でも作品のねらいや木の材質種類の説明など作家から聞いた内容を担任は、丁寧にわかりやすく園児に解説(声掛け)していた。木くずの匂いや木片を持ち帰る子ども

の遊ぶ姿は万国共通であった。後日隣接する幼稚園に訪問したが、戸外の緑豊かな空間形成は、子どもの創造性を膨らませる。大木の周りの野外遊具のつくりや配置を見ていると、自然と文化的環境の融合から、大人もくつろげる構成であると感じた。自然環境豊かな園庭に佇むと童心に還る思いであった。写真13)

幼児期の学びは「遊びを通した学び」であり。緩やかに起伏のある芝生の園庭で子どもたちは、遊びを通して様々な学びにつながっているようであった。先生たちの多様な造形アプローチは部屋内外でみる事ができた。



写真13 植物園に隣接する幼稚園は起伏にとんだ緑の丘の庭であり、屋外遊具が木々の間に点在。

園内の子どもの部屋には、机の上に子ども個人個人のドキュメンテーションが立てかけられていて、いつでも取り出せる状態にあった。作品がファイリングされ可視化されていた。ドキュメンテーションとは、子どもたちの会話や行動、その日の活動内容などを、写真や動画、コメントなどで記録し、みんなが目に見えるようにするものである。この取り組みは、イタリア発祥の幼児教育方法「レッジョ・エミリア・アプローチ」で行われてい

るもの¹¹⁾であるが、ヨーロッパ各国や日本でも注目が続いている。子どもの作品と観察記録・ねらいがファイリングされ、一人ひとりの成長の過程が読み取れる。様々な素材を扱い、豊かな表現が園の日常生活の中で育まれている。その様子が一瞬でわかる内容であった。写真14)



写真14 観察とドキュメンテーション

写真15)にあるように、ページの最初は絵の具のぬたくり絵である。はらぺこあおむしの絵が描かれている。黄緑と緑色を交互に塗り分けていた。

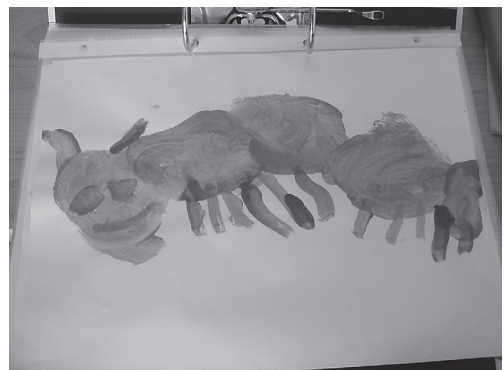


写真15 ドイツ幼児の作品：はらぺこあおむし

写真16) はクレヨンによるはじき絵である。蝶を描き、その上から紺色で塗りこみクレヨンをはじかせる技法は、様々な国で見られる代表的な幼児美術の技法である。



写真16 3歳幼児の作品：はじき絵

V. まとめ

西欧を中心に様々な文化圏の幼児美術に触れ、小学校児童の作品も収集してきた。韓国、イタリアを訪問したがそれらの国についてはまたの機会にまとめていきたい。

ひとつの国を長期に亘って深く継続的調査には至っていないが、今回のように一度まとめてみることで、次なる課題を見つけることが出来た。

それぞれの国の幼児教育・学校教育を調査研究していくと、日本でも取り入れたい試み、教育アプローチが数多くあることに気づく。

アジアの中の日本の美術教育の比較、アジアと西欧の比較など、平面、立体に捉われることなく、幅広い視野で調査していきたい。美術教育の可能性を探り、今後も課題研究に創造性を膨らませることが、子どもにとってより豊かな成長につながることを考える。

注

- 1) 原田種雄・赤堀侃司編『国際理解教育のキーワード』有斐閣、1992年、50頁
- 2) Hansard, House of Representative, 30 May 1978, Canberra: Australian Government Publishing Service, 1978, p2731
- 3) 丸い円である頭から手や足が生えたように描かれる3歳ころの初期の人物画。
- 4) 西田秀雄「よい絵の描かせ方」創元社、1958
- 5) アルゼンチンの教育制度
<https://sekai-ju.com/life/arg/life/argentina-education/>
- 6) 皆本二三江編著「0歳からの絵画制作・造形」文化書房博文社、1982、p46
- 7) 海外留学「スペインの教育制度」より
https://ryugaku.jasso.go.jp/oversea/_region/europe/spain/info_es_system/
- 8) 森本昭宏「国際彫刻シンポジウムに見られる対話型鑑賞教育－ドイツの園児・小学生の活動を中心として－」埼玉学園大学紀要 第12号
- 9) 山田敏「北欧福祉諸国の就学前保育」明治図書、2007年、p61、62
- 10) 同上 p65
- 11) 同上 p66
- 11) ほいく is 1日3分で保育を楽しく
<https://hoiku-is.jp/article/detail/484/#:~:text=>

〈引用・参考文献〉

- 石附実・笹森健編「オーストラリア・ニュージーランドの教育」東信堂、p89、p90
〔ドイツの子育て・保育事情～ベルリンの場合〕 第2回 日本とドイツの保育施設比較（後編）ベネッセ教育情報サイト